レオンとトルギーン

村上 タツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レオンとトルギーン

【Nコード】

N6506W

【作者名】

村上 タツ

【あらすじ】

レオンとトルギーンは何でも屋をやっている。しかし、依頼は全然こなく、非常に貧乏な二人。そんな時に一人の依頼者が彼らの元を訪れた。

三人の出会い

「今日の飯代がないんだけど」と、トルギーンが言った
トルギーンはレオンの仕事仲間であり、幼馴染でもある。

俺たちは何でも屋をやっている。

何でも屋という名前の通り、依頼されたら、基本的になんでもやる。
しかし、人数が二人で、知名度も低いため、依頼が全然なく、・・・
・懐が非常に寂しくなっている。

「今、いくら持つてる」

「120ギル」

「俺は160ギルだな」

二人合わせて280ギル。これではおにぎり二個がやっとだ。

「どうするよ、レオン」

「依頼はきてないのか」

「来てたらとつくに言ってますよ」

『・・・・・・・・』

まずい、これは久々の大ピンチだ。だからといって、名案が浮かぶわけでもなく、腹を鳴らしながら考えていると、

「ここがなんでも屋でよろしいでしょうか」

と言う、女の人の声がした。

「依頼が来たみたいだよ。」

「神はまだ我々を見捨てていなかった。神よ感謝します。」

「いつも、神への信仰心なんて欠片も持ち合わせてないくせに」

「神には祈りたい時に祈ればいいんだよ」

「なんてやつだよ。全く」

「神はお前が思っているより慈悲深いんだよ」

とレオンは言った後、依頼しに来た女を見た。

綺麗だった。

相手が依頼主であることも忘れて、思わず見入ってしまった。若い。

おそらく、二十歳はいつてないだろう。

ちなみに、レオンとトルギーンは二十歳である。余談だが、若い故に何でも屋に依頼する気にならない人も、少なくない数いるようである。

「あー、どういったご用件でしょうか。」

「・・・」

「あー」

「この人達で大丈夫なのかしら。すごくたよりなさそうだけど正直イラつときたが、相手は依頼主だ。ここは丁寧な言葉を心掛けることにした。」

「依頼内容を教えていただけますか」

「私って本当についてないわ。たよれるのがここしかないなんて。堪える、堪えるんだ、俺。今怒ったらダメだ。」

「レオンがあそこまで我慢するなんて」とかトルギーンが言っていたが、無視した。そんな言葉に返事を返す余裕は俺にはないのだ。

「依頼内容を教えていただけますか。」

「なるほどね。そうきたか。」

もう我慢の限界だった。

「どういうことだよ。意味わかんねーよ。」

「意味が分からなくて当然よ。私にも分からないわ。」

「なんだよそれ。おまえ依頼する気あんのかよ。」

「そろそろ本題に入らせてほしいんだけど・・・」

「悪いのは俺ですか。間違いなくあんただろ。」

「依頼主に対してその口の聞き方は失礼よ。」

「そうだよ。もっと丁寧に接するべきだよ。」

「おまえ、いきなりはいつてきて、あつちの肩をもつのかよ。なら、二人で依頼の話でもしてくれ。」

「で、依頼内容なのだけれども・・・」

「落ち着いて話してくれればいいですよ。」

「ありがとう、やさしいのね。」

「いえいえ、私には身に余るお言葉です。」

「なんだろう・・・一人取り残されてる気がする。」

「このままではまずいと思い、会話に参加することにした。」

「そうだけ。俺達が解決やるからよ。」

「あなたは黙ってもらえますか。」

「そうだよ、レオン。今せっかく仲良く話してたのに。」

「俺そんなに悪いことしましたか。」

「・・・」

「ここで無視はやめてくれ。マジで心が折れるから。」

「・・・」

モウダメダ、ボクハタチナオレナイ

「すみません。結構重度心の傷を負ったみたいなので、この辺でや

めませんか。」

「そうね。さすがにやりすぎたわ。」

「だったら、最初からやるな。」

「あら、もう立ち直ったの・・・つまらないわ。」

「心が悪だ。ダークだよ、あの人。」

「そんなことより、早く依頼を聞きましょうよ。」

「なにげに、お前が一番酷いよ。全く今日は厄日だな。んで、そろ

そろ依頼内容を言っつてほしいんだが。」

「そうね。実は、私を護衛してほしいの。」

「変だとは思っていた。見るからに高級そうな服をきていたり、この国の貴族の象徴である金髪の碧眼であったり、それでいて、護衛が一人もいないのが、おかしいのだ。」

「なぜ、護衛が必要なんだ。」

「詳しくはいえない。ただ、このままではこの国が大変なことになるわ。」

「最初から一人できたのか。そんなはずはないだろう。」

「ええ、その通りよ。護衛はいたわ。全員殺されたけどね。」

いきなりのその言葉に俺達が呆然としてみると、彼女は

「今は、身代わりになってくれた侍女のおかげで、私は死んだと思われるはずだけど、気づかれるのも時間の問題。・・・正直、依頼を受けるか迷ってるなら、受けないほうが賢明よ。私の護衛を引き受けたら、死ぬかもしれない。実際、私についてた護衛はみんな死んだわ。それでも、この国を守るためには、他に方法がないのだから、自分勝手なのはわかっているけど、引き受けてほしいわ。」
「とてもヤバイ依頼であることは分かった。それでも、俺達は分かった。大船に乗ったつもりでいてくれていいぜ。」
「そうですよ。俺達のコンビは最強なんですから。」

「あなた達、自分の命がかかっているのを本当に分かっているの。」
と彼女は言ってきた。

死ぬ覚悟なんてできてなんかいない。自分の命はもちろん大事だ。それでも、困っている女の子をほっておくなんてできなくて。力になってあげたいと思っている自分がいて。

「今夜の飯代もないんだ。依頼のえり好みなんてできるか。」

「全くだよ。その代わりギャラはたっぷり払ってくださいよ。」
なんて言っていた。

驚いて何も言えない彼女に、俺は

「ところで、名前はなんていうんだよ。」と聞いた。

「エリン」と彼女は答えてくれた。

「エリン・・・」

「どうかした？」

「いや、なんでもない。俺はレオン、よろしくな。ちなみにこいつはトルーギンだ。」

「ちなみにつて酷いな」。よろしくね。エリン。」

「よ、よろしく。」

「おいおい、もっとリラックスして、楽しくやろうぜ。」

「そうですよ。まあ、レオンは元気過ぎて面倒くさいですけどね。」

「またそういう酷いことを。」

「ありがとう。」

「なんか言ったか。」

「別に」。うるさい護衛に憂鬱になっているだけよ。」

「俺ばっか、なんでこんなに言われるんだ。」

とワイワイやっている中、エリンは満面の笑みを浮かべ、もう一度誰にも聞こえない声で、

「ありがとう」とつぶやいた。

三人の出会い（後書き）

高校1年の村上 タツです。

更新する頻度は遅いと思いますが、楽しんで読んでもらえる幸いです。

旅立ちのとき

「で、具体的にどこまで護衛をすればいいんだ。」

「エリシャンドの首都、バンダーレまでよ。」

レオンとトルギーンは同じ結論に至った。

「戦争が起こるのか。」レオンが聞くと

「あら、頭の回転は見た目ほど悪くないみたいね。」と言われた。

「どつという意味だそれは。」

「言葉通り受け取ってくれば、いいわ。」

「ふざけるな。」

「レオンはちょっと黙ってて。」

とトルギーンに真剣な顔で言われたので、黙ることにする。

「ゲリシアと戦争になるの？」

「そう、だから国王陛下はエリシャンドと同盟を結ぶことにしたのよ。」

「じゃあ、あなたはゲリシアに狙われているってこと？」

「おそらく、そういうことになるわね。」

「でも、ゲリシアはいくら妨害しても、どうせ新しい使者が来るのだから、するだけ無駄なんじゃないか。」

「それがそうでもないの。ゲリシアに送りこまれている、間諜の情報によると、戦争の準備が整うまで、後、二週間ほどだそうよ。それまでに同盟を結べなければ、レストニアはエリシャンドの助けがない状態でゲリシアと戦うことになるわ。残念なことにレストニアにはゲリシアに勝てるだけの戦力はない。だから、エリシャンドと早急に同盟を結ぶ必要があるの。」

「でも、エリシャンドも大国のはずだろ。向こうに同盟を結ぶ意味はあるのか。」

「確かに、エリシャンドにはゲリシアに負けられないだけの戦力があるはずよ。でも、わが国エストニアがある方がエリシャンドにとって

都合がいいの。ゲリシアはエストニアを倒さないと、エリシャンドに攻め入ることはできないわ。つまり、エリシャンドにとって、エストニアは、ゲリシアをすぐに自国に入ってこれないようにするために、都合のいい国なのよ。」

「向こうから、同盟を申し込んでくる可能性はないのかよ。」

「大国であるエリシャンドが小国であるエストニアに申し込むなんてことはありえないわ。」

「それもそうか。」

「納得してくれた？」

「したけど・・・俺達にこんなに話してもいいのかよ。」

「そうね。確かに喋りすぎたかもしれない。でも、あなた達には護衛をもらうのだから、少しでも、事態の深刻さを分かってほしかったの。」

「なら、十分過ぎるほど分かったつもりだぜ。」

「ならよかった。ところで、あなた達ってどれくらい強いのか？」

「それを知らないで、ここに来たのかよ。」

「そういうわけでもないのよ。ここらへんで一番強いのは誰かと、ここに住んでいる傭兵とかに聞いたら、みんな、あなた達が強いというから、雇うことにしたんだけど、強いのか？」

「まあ、大抵の相手には負けない自信があるぜ。」

「レオンって本当に強いのか？」

「見た目はあんななんですけど、むちゃくちゃ強いですよ。」

「あんななんてどういうことだよ。」

「トルギーンは強いのか？」

「まず、負けませんよ。レオンには勝てたことがないんですけどね。」

「レオンってそんなに強いんだ。」

「そうだが、だから安心してくれていいぜ。」

「はいはい、期待してますよ。」

「お前、本当は期待してないだろ。」

「してるわよ。トルギーンにね。」
「期待に応えられるように頑張るよ。」
「俺にも期待しろー。」
「うるさい男は嫌われるわよ。」
「いや、期待してくれないと、モチベーションがあがらないという
か。」
「じゃあ、護衛はトルギーンだけでいいわ。もちろん、あなたへの
報酬はゼロよ。」
「なんか、すごいモチベーションがあがってきた!!!」
あまりのわざとらしさにエリンとトルギーンが呆れていると、レオ
ンが焦ったように、
「いや、本当だった。」
「本音は？」
「報酬ゼロはやめてください。」
「レオン・・・情けないよ。」
「そうは言っても、金はほしいんだよ。」
「いつから、こんなに金に執着するようになったんだよ。」
「そうはいつでもさー。」
と話をしながら、レオンとトルギーンとエリンは何でも屋を出た。

旅立ちのとき（後書き）

なんとか一週間に一度は更新したいと思います。

レオンとエリン

「暇だわ・・・」

「いや、まだ歩き始めてから、三分しかたってないけど。」とレオンが呆れたように言う。

「なんかおもしろい話してよ。」

「いきなりいわれても・・・」

「そうね。あんたの話なんかつまらないか。」

「あまり人をなめるなよ。大爆笑させてやるぜ。」

「レオン、完全にもてあそばれてるよ・・・」何かトルギーンが言っているみたいだが、ほっておいた。

レオンは自信があった。自身のことを笑いの神様だとおもっているくらいだ。これで笑わなかったら、人間じゃない、そうおもっている話を言っつてやることにするか。エリンが爆笑しているのが目に浮かぶぜ。

「うおっほん。ある男が女に恋をしてしまったんだ。初恋だった。

そして男は告白することを決意した。一晩中考えて書いた手紙を男は女に渡した。しかし、女はなんと人間に化けた狐だったのだ。」

『・・・』

「つ、次は・・・」

「もういいわ。まさかここまで酷いなんてね・・・」

「こんなにつまらない話はじめてだよ。」

「こんなに言われるなんて・・・」ショックだった。レオンは調子に乗りやすいが、へこむ時はすごくへこむ面倒くさいやつなのだ。

「じゃあ、昨日みた夢の話でもしてよ。」

「ああ、分かった・・・」

「うわ、すごく落ち込んでるよ。」

「うっ、やっぱり話さなくて・・・」

「男の子が出てきた。」

「話始めちゃったよ。」

「このまま話させましょう。」

「男の子はそれなりに楽しい生活を送っていた。そんな男の子には最近気になることがあった。夜、窓を開けると女の子が星をみているのだ、憂いをおびた顔で。男の子は女の子が外に出ているのを見たことがなかった。男の子はある時、女の子の家に行くことにした。なぜかほうっておけなかった。家に行つて女の子と話がしたいと言つと、最初は警戒していた女の子のお母さんも、娘の話相手になつてあげてくださいと言つてくれた。後に男の子は思うことになる。なぜ、自分はこの家を包んでいる暗い雰囲気気づくことができなかったのだろうと。女の子の所に行くと、

『どうして、来たの?』と聞かれた。

『なんで、いつも窓から星を眺めているの?』

『星になるから。』

男の子は冗談を言っているんだと思った。

『名前はなんていうの?』

『エリン。』

『いい名前だね。おれはレオン、よろしく。』

『最初の質問に答えてもらえるかしら。』

『君の星を眺めている姿をみていると、なんかほっておけなくて。』

『変わった人ね。』

『そうかな。』

『絶対に変わつてるわ。』と言う彼女の顔が、入つて来た時よりも明るくなっているようにみえて、それだけでレオンはうれしかった。それから毎日、レオンはエリンに会いに行った。彼女が笑ってくれるだけで、レオンはうれしかった。こんな生活が当たり前のように続くものだと思つていた。レオンはいつものようにエリンの家に行つた。エリンは具合が悪いから今日は会えないとレオンにお母さんから伝えてもらうように言つた。

『言わなくていいのかい。』お母さんが言つた。

『いいの。レオンが悲しむ所なんて、見たくないから。』

『でも、どうせ後でわかるんだよ。その時、レオンはあなたからいつてほしかったって、きつと思うはずよ。』

『レオンには笑っていた私だけを覚えていてほしいの。私が笑顔でいられたのはレオンのおかげだから。』 そう言った時のエリンは笑顔を浮かべていた。

三日後、エリンは死んだ。レオンは号泣した。神様を恨んだ。そんなレオンの元に一通の手紙が届いた。

エリンからだった。手紙には不治の病にかかっていたことを黙っていたことに対しての謝罪とレオンに向けての感謝と自分のことなど忘れて楽しく生きてくださいと書いてあった。レオンは思った。神様なんてこの世になんかいないと。エリンを忘れることなんてできないと。なぜエリンが死ななければならなかったのかと。優しかったレオンはいなくなつた。そんなレオンを変えたのは後に彼の親友であるトルギーンである。トルギーンはレオンが話すことを頑なに拒んでも、怒りもせず、ただそばにいてくれた。時でさえも癒すことのできなかつたレオンの心の傷をトルギーンは癒してくれた。今も、エリンのことは忘れていない。でも、毎日を楽しく過ごしている。エリンもきつと今の自分の姿を喜んでいてくれるだろうとレオンは思った。

「感動したけど、なんで名前がエリンなのよ。」

「夢だから。」

「そーだけど。」

「そうか、今日は・・・」

「ありがとな。」

「やめようよ。親友として当たり前のことをしただけなんだから。」

「なんの話よ。」

「お前には関係のない話だよ。」

「レオンのくせに生意気よ。」

「レオンのくせにとはどういうことだ。」

と言い争い始めた二人のことをトルギーンは「エリンはもっとおとなしかったな。」とつぶやきながら、どこかなつかしそうにしていた。

レオンとエリン（後書き）

更新が遅れてすみませんでした。楽しんで読んでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6506w/>

レオンとトルギーン

2011年11月15日03時24分発行